

朝鮮中の抗日と大日本帝国の瓦解（六）

駁逆の明治維新―相楽赤報隊誅略―

北島平一郎

大阪経済法科大学研究補助金による論文第六号

目次

第一章

西郷隆盛と相楽総三

相楽総三の東山道出師

鳥羽、伏見の戦い、幕軍敗退

第二章

年貢半減策

勤王隊総抹殺

国家と徴税

百姓の持ちたる国

第三章

明治維新と農民戦争

相楽総三の生いたち

農村騒擾と年貢半減策

相楽赤報隊の進軍
相楽総三の独断専行

第四章

追分戦争（一）

相楽総三総裁
碓氷峠の赤報隊
勤皇隊抹殺令

第五章

追分戦争（二）

軍部大臣現役武官制
ファッショ独裁
大黒屋討入り
華夷の辨

第六章

赤報隊の最后

上からの改革
明治新政府と赤報隊
赤報隊と二・二六事件
相楽総三の斬刑

第一章 西郷隆盛と相樂総三

相樂総三の東山道出師

薩摩と幕府の海軍の江戸湾決戦のあと、正月三日（慶応四年、明治元年）兵庫に上陸した相樂総三と同志は、総勢二十余名、ここから京都に至り、東寺の薩軍本営にて西郷隆盛に面会した。そして江戸の薩邸焼討、海戦等の報告をした。これらのことはさきに伊牟田尚平等によって伝達が行はれていたと思はれるが、西郷は大いに歓喜し、これにて討幕の大事成る、と言った。そしてここで諸君にもう一奮発してもらいたいというので、彼等に東北に転戦することを命じた。相樂等に異存のある筈は無く、隊をととのえて東北方面（東山道）に出陣することとなった。

東北行のプランは、綾小路俊実、トシザネ滋野井公寿キミヒサの二人の公卿の下に隊が編成され、東山道総督府先鋒嚮導隊としてまづ江州坂本に向かつて進発することとなった。相樂等はこれに組入れられた。銃百挺、彈丸等を調達し、隊員も正月七日、滋賀の坂本へ着く頃は人々馳せ参じて三百名程になった。

こうして東北転戦勤皇実現という勇ましい話になったのであるけれど、この一行は所謂港で船を割るという事態に遭遇し、出発早々一月の末には京都へ呼びかえされることとなった。

鳥羽、伏見の戦い、幕軍敗退

この様な事が何故出来たのかというと、それは理由單純明瞭で、明治新政府はここで相楽総三と赤報隊を潰滅さそうだったのであった。相楽等は西郷隆盛に従つて江戸で市中攪乱をやり、薩摩御用盜の片棒をかついで暴れ回り、ついに薩邸焼討をみちびき出し（法学研究所紀要二八号）で、実力討幕の口実をつくつたのであり、これに対し西郷は前述の如く大いに喜び、これを谷守部（干城）に語りて曰く、戦端開けたり、速に乾君（板垣退助）に報ぜよ、と言ひ、相楽に対し、その功を大なりとして「甚だ好都合に行つて喜びに耐えない、こちらでも続いて官軍の大勝利であるから旧幕府が名実ともに瓦解するのは間近い。これといふのも諸兄が江戸に於て、応援してくれた結果に他ならぬ」と懇ろに礼を言つた。しかし、実は相楽と赤報隊の功業稱讃はここまでであつた。時勢の変化と共に白が黒になり、功業が罪科と變つた。

その一大原因は鳥羽伏見の戊辰戦争が、一月七日、両卿一行の坂本から守山への移動のときまでにあらかた決着がつき、數に於て勝つた幕府軍が薩摩を主力とする長州、土佐等の西軍に大敗を喫したことであつた。幕府側は、桑名、大垣、高松、松山諸藩が東軍を形成し、会津藩は京都守護職の名譽にかけて奮戦したが、利あらず、幕府軍士氣低調、有力彦根藩は動かず、津藩、淀藩等徳川譜代恩顧の大名の返り忠まであり、安芸、因幡等も官軍に投じる始末となつてここに幕軍再起不能となり、討薩の表を奉つてこのいくさをはじめた総帥前一五代將軍徳川慶喜は、すべての部下を放擲してナポレオン一世モスクワ逃散のひそみになつたこともあるまいが、五本骨の將軍家金扇馬じるし迄もほつたらかして身一つで江戸へ逃げかへつた。こうして早くも戊辰戦争は実質上の決着がついたという状況となつた。朝廷（明治新政府）の方でもこうまでアッサリ二、三日でこの二七〇年、大屋台骨で支えられていた江戸幕府が潰滅するとは思つてもみなかつたので拍子抜けがした程であつた。こうなると西郷等が放つたゲリラ戦用の相楽や赤報

隊は、当然無用有害となる。彼等は御用盗を依然つづけ、幕府各藩を手あたり次第おどして金穀、武具等をまきあげていた。東北行の途中でも彦根藩、稲垣若狭守、最上駿河守、遠藤但馬守等各陣屋、加納藩、長島藩等を襲っていた。東北戦争については、明治新政府が不勤王藩をえらび出し、これを応懲するという性格のものとなった。こうして赤報隊を討て、ということになったのである。正月二二日頃から赤報隊は富家に押し入り金品を強奪し、東北行の道筋を勝手に自ら策定して両卿の指図に従はない、つまり彼等は偽官軍である、ということになってその噂が道々にばらまかれた。

第二章 年貢半減策

勤王隊総抹殺

こうして結局最后相楽総三と赤報隊は、残存約六〇名が捕はれ斬刑その他追放、獄死等となって潰滅、悲惨な結末をとげる。その終焉は同年三月三日とされる。この頃即ち慶応三年、四年（明治元年）は幕府が最后たおれるか、どうかの瀬戸際となり、朝幕共にその攻防に秘術をつくし、また最も神経質となつてあせりにあせていた時であつた。この為、赤報隊の如きゲリラ集団が生れ、薩摩側は猫の手も借りたいぐらいの切端つまつた気持からこれを利用したのであつた。この頃赤報隊に類似したゲリラ戦闘隊は朝幕共に種々のものがあつた。いまその主なものを列記しておく。と次の如くなる。

勤王隊

隊名	結成年	結成地	終焉	頭首
花山院隊	一八六七年	大分県	弾圧	花山院家理 <small>イェノリ</small>
高野山隊	一八六七年	紀伊高野山	解散	鷲尾隆聚 <small>タカツネ</small>
高松隊	一八六八・一	京都→甲府	弾圧	高松実村 <small>サネムラ</small>
北越草莽隊	一八六七・十一	越後蒲原	解散	
この他山国隊、農兵隊、迅衝隊等。				

これら諸隊は勤王倒幕を旗印として大かた公卿をかついで戊辰戦争にさきがけてつくられたが、その肝いりは岩倉具視であるとされる。（佐幕派は額兵隊、衝撃隊、伝習隊、遊撃隊、甲陽鎮撫隊、衝鋒隊等一〇指に余る。京都、大阪、千葉、仙台等で結成され、鳥羽伏見、会津戦争から箱館までを戦って最后潰滅した。）しかしこれら勤王隊は戊辰戦争の帰趨が早くも明らかとなると直接間接弾圧、追放となつてすばやく解散させられた。その中でも悲惨なのは高松隊でこれは甲州布告に辰年の年貢半減をかかっていた。そのせいか同隊は赤報隊と同じく偽官軍とされ、隊長の小沢一仙は、隊解散と同時に捕らえられて有無を言はず悪逆無道の巨魁として斬首された。これから取り扱う赤報隊の年貢半減布告と同様、これらのことが、両隊の偽官軍事件となり、隊長や幹部の斬刑になつたとの感が深い。

戊辰戦争の帰趨がみえてくるとこの様な赤報隊を抹殺し、幕府倒滅の為の攪乱戦術は最早必要ないとし、社会、国

家の秩序を回復し、新国家の建設をはじめなければならない。こうして騒擾、攪乱を終息するためその衛に当たつていた赤報隊討滅の必要が早急に起こつてきたのであつた。

そして今一つ赤報隊が新秩序の癌となる事情があつた。それは今いった年貢半減の布告であつた。つまり税金を五割引というのである。これは大変な事で、凡そ国家がある限り、その機能の第一は徴税にある。それを大膽にも半減を打ち出したのであるが、それがその時、太政官によつて政策として承認されたのであつた。朝幕関係転回時にいかに官軍側も事態に緊張、焦慮していたかということであろうか。布告許諾の経緯は次の如し。

両卿の一隊が滋賀県愛知川松尾村に入つた正月八日、相楽総三は部下一名（金輪五郎）をつれて両卿の許しを得て京都へ引き返した。そして太政官にさきゆきのことを陳情に及ぶのである。このとき相楽は自分に扈從するものを編成してはじめて赤報隊の名をそれに冠した。これからして相楽総三が自ら遠大な計画を蔵し、官軍につき乍ら、大事をひとりではからう野望を胸にひめていたことが察せられる。官軍は暴れ馬をふところに飼つていたのである。ちなみにここで一隊は、綾小路、滋野井、相楽部隊と三隊にわかれ、赤報隊は、信州へ赴き、甲州を鎮め、東征官軍の江戸討入りに協力すること、となつたのであつた。さきの二隊は、結局召喚命令にあつて前後して京都へかえりつく。

国家と徴税

相楽の陳情と太政官の応答は左の如し。

建白書

誠恐誠惶謹言

艸莽卑賤ノ身ヲ以テ建言仕り候ハ甚ダ恐入ル次第第二候得共、此度、綾小路殿滋野井殿兩卿ノ御勢ニ加リ先登仕り候ニ付、愚存ノ義、萬死ヲ犯建白仕り候、當時賊勢既ニ浪花ヲ去リ候趣意ハ必ズ關東割據ノ所存ニテ唯今ノ處ニテハ賊ノ餘燼コレ無キ様ニ候得共、關東ハ固ヨリ彼ノ巢窟ニ候間、彌ヨ東下仕り候ハバ是則チ虎ヲ山ニ放チ候患ヒト存奉り候、東海道ハ小田原ノ城ニ據リ兵ヲ函嶺ニ出シ、中仙道ハ高崎ニ據リ、兵ヲ白嶺（註・碓氷峠）ニ出シ、要地ヲ塞ギ防禦致サレ候テハ甚ダ蹈破リ難ク實ニ斧ヲ用ユル悔イコレ有ル可ク候間、賊ノ不意ニ出テ、双葉ノ内ニ速カニ御征伐在ラセラレ度存奉り候、加之、今、黠夷ノ輩（註・イギリス等ヲ指ス）我ガ隙ヲ覬覦致シ居リ候義故、此鵲蚌ノ弊ニ乗ズ可キモ計リ難ク是又一大事ノ義ニテ、兎角急ニ御東征在ラセラレ度ク存奉り候、最モ右御東征ノ義ニ付定テ御廟算の數々コレ有ル可ク候得共、當時ノ處、是マデ幕府ニ於テ關東筋ハ甚ダ暴斂ヲ極メ民心皆奸吏ノ肉ヲ啖ハント存ジ居リ候義故、幕領ノ分ハ暫時ノ間賦稅ヲ輕ク致シ候ハバ天威ノ有難サニ歸嚮シ奉リ、例令、賊ニ金湯ノ固メコレ有リ候トモ、倒戈ノ者、賊ノ蕭牆ニ起リ、必ズ以テ御東征ノ御一助ニモ相成ル可クト存奉り候、恐ナガラ右ノ條々ハ卑賤ノ者ノ建言仕り候マデモコレ無ク定メテ廟議モコレ有ル義ト存奉り候得共、滋野井綾小路兩卿ノ思召ニ於テモ此義深ク御心痛遊バサレ候義故、憚ラズ申上候。

歎願書

方今御東征ノ義ニ付、滋野井侍從殿、綾小路侍從殿江州松尾山正明寺マデ御出張成サレ候處、御人数追々馳セ加

リ一方ノ御助ケニモ相成ル可ク思召候ヨリ其段御届申上ゲ、官軍ノ御印、且ツ御東征先鋒ノ義、御願ヒニ相成リ候處、官軍ノ義ハ

勅許ニ相成リ候得共、御印且ツ先鋒ノ義命ゼラレズ候、官軍ノ義ニ候ハバ是非ソノ御印コレ無ク候テハ、全軍ノ折り合ヒ等ニモ相懸リ且ツ、賊を討伐仕リ候ニモ都テノ義ニ付不都合ノ次第ニ候間、此情實逐一御憐察下シ置カレ、歎願両様、急速、

勅命ヲ蒙リ度ク存奉リ候、歎願ノ筋、相叶ヒ候得バ、今賊ノ巢穴ヲ結バザル内ニ先鋒仕リ、速ニ寸功ヲ奏シ奉リ候以上。

この建白と歎願とに依り、太政官の坊城大納言から、相楽に勅定書をくだし置かれた。相楽の光榮これに過ぎたるはなし、ひれ伏して御受け申上げた。その寫しが傳はつてゐる、次の如し。

滋野井侍従

綾小路前侍従

其手ニ属シ候草莽士従前勤

王之志不淺趣殊ニ關東民情辨知之聞モ有之候間旁以盡力可仕三道官軍打入之節ハ御印之品

朝廷ヨリ可下賜候間其節ハ速ニ東下億兆士民

王化ニ服候様嚮導先鋒可仕夫迄之處蓄兵力儲糧食機會到来ヲ相待尤過日被仰付候通り東海道鎮撫使之随指揮候様可申候

◇全国総生産米（水田）の国家・領主・農民への分配関係の変化◇

	1873(明治6)年 [Ⅰ]		1881～89(明治14～22)年平均 [Ⅱ]		1890～92(明治23～25)年平均 [Ⅲ]	
	%	千石	%	千石	%	千石
米(水田)総生産額 1)	100	25,914	100	34,361	100	40,542
国 家 2)	29	7,546	22	7,470	13	5,146
領主階級 3)	19	4,968	--	--	--	--
領主(華族)	4	1,175	--	--	--	--
家臣団(士族・卒)	15	3,793	--	--	--	--
農民層 4)	52	13,400	78	26,891	87	35,396

備考

- 1) 1873年は、かりに1874年『府県物産表』による。
1881～89年平均、1890～92年平均額は『帝国統計年鑑』による。
- 2) 1873年は、地租改正局地租帳掛調査「明治6年貢額表」(『地租関係書類彙纂(付録)』)による米額より領主階級取得分を控除したものと、「日本府県民費表」による1873(明治6)年民費総額をかりに1874(明治7)年平均石代価7円28銭で現石換算したものの合計額。1881～89年平均、1890～92年平均額は『帝国統計年鑑』により、田租総額および水田にかかる地方税(府県税地租割、区町村費地価割・反別割)総額の合計をその年米価で現石換算したものの、それぞれ累年の平均額
- 3) 「太政類典」(第2編318巻)所蔵「華士卒家禄賞典并寺院禄高総計表」(1873(明治6)年1月現在)による。なお賞典禄(207,187石5)は集計の便宜上、領主の部へ合算した。
- 4) 米穀総生産額から、国家、領主階級取得分を除いた残額である。

(岩波日本歴史、近代2、一九六七)

御沙汰之事

正月

但今度不圖干戈ニ至候儀ニ付テハ萬民塗炭之苦モ不少依之是迄幕領之分總テ當分租税半減被仰付候昨年未納之分モ可爲同様來巳年以後之處ハ御取調之上御沙汰可被爲在候義ニ候間右之旨分明ニ可申付事(長谷川伸「相楽総三とその同志」新小説社、一九三三)。

かくの如く、相楽の野望の遠大なるは、これを見ると歴々たる如くである。さきにふれたが租税の事は、凡そ国家機能の最大、最重要の業務である。そしてこれを徳川政権についてみても徴税の根本は土地税(地租)である。徳川末、明治初の徴税を一瞥すると、それは簡単に次の如く諒解される。封建国家は農民の総生産米の

四八%を収奪し、そのうち四〇%（総生産米の一九%）が領主階級の純所得となっていた。この様に重要な国家の収入源である地租は云はば国家の血液であった。

この関係は明治国家初期の段階に於ても変わらず、否、むしろ民族国家の完成、植民地主義国家の発展を展望しながら、その地租徴税は増大強化せられていった。例えば一八七五（明治八）年の租税中、土地税はその八九%を占めている。すこしくわしくみるとこの関係は次の如くなる。即ち明治元年の歳計をみると、租税収入の総額は三六〇万円、その中地租は二〇〇万円（海關稅七二、開市開港場諸稅一〇、運上冥加諸雜稅三一（單位、万円））であった。これは国家同年の全歳出額約三、〇〇〇万円の一〇%余にすぎなかった。ところがこれが、歳計第六年度には、地租が国家同年歳計総支出のほぼ全額を負擔することとなっている。即ち第六期租税全収入六、五〇〇万円、同歳出六、二〇〇万円、このうち六、〇〇〇万円が地租であった（歳入は紙幣發行、借入金等の非常手段でまかなう。第二期租税収入四〇〇万円、第三期九〇〇万円、第四期一、二〇〇万円、第五期二、一〇〇万円、第六期に於てはじめて租税の収入が歳出の全部を負擔し得ることとなった）。これで見ると明治国家の租税収入も主として地租から賄われ、これで所謂近代化、商工業の發達、朝鮮中植民地化政策の推進がはかられたことになる。明治国家（大正、昭和）が海外侵略を意圖した分、租税の重荷がはかられ、地租のかたちで農民収奪（地主体制）が封建時代に倍増する苛斂誅求となつたのであった。人は明治の近代化を口にするときその財源のよつてきたところを忘れてはならない。（「明治大正史、經濟篇」朝日新聞、一九三〇年。「岩波日本歴史、近代3」一九六七年）。

この情況下で幕末年貢半減策を打出すというのは明らかに革命である。短絡的に理解しても平成日本の国民所得統計中年間国内総支出は約五百兆円、民間最終消費支出は約三百兆円である。これを基本に年貢を半減にするという政

◇国民所得統計の推移◇

(1990年基準、単位10億円、四半期の数値は季節調整済みの年率)
(換算=実質、カッコ内は前年比または前期比増減率%▼は減)

国 内 総 支 出 (G D E = G D P) 年 率 換 算 成 長 率	1998年		98年	98年	寄与度
	名目	実質	7~9月期	10月~12月期	
	495,207.6 (▼2.5)	478,265.0 (▼2.8)	477,472.9 (▼0.3) (▼1.2)	473,664.0 (▼0.8) (▼3.2)	▼0.8
民間最終消費支出	304,362.2 (▼0.7)	282,103.6 (▼1.1)	281,908.0 (▼0.1)	281,663.3 (▼0.1)	▼0.1
民間住宅	20,088.5 (▼15.1)	18,554.1 (▼13.7)	18,394.1 (▼6.1)	17,103.3 (▼7.0)	▼0.3
民間企業設備	70,832.3 (▼12.3)	78,717.9 (▼11.4)	77,818.0 (▼2.7)	73,366.6 (▼5.7)	▼0.9
民間在庫品増加	1,405.6 (▼21.1)	1,699.1 (▼25.3)	1,286.5 (▼21.7)	1,650.7 (28.3)	0.1
政府最終消費支出	49,938.7 (0.9)	45,306.0 (0.7)	45,570.9 (0.8)	45,318.5 (▼0.6)	▼0.1
公的固定資本形成	38,902.3 (▼1.8)	39,470.3 (▼0.3)	38,533.8 (3.7)	42,635.7 (10.6)	▼0.9
公的在庫品増加	-83.5 (▼161.0)	-69.2 (▼171.1)	-41.1 (▼117.1)	-584.4 (-)	▼0.1
財貨・サービスの純輸出	9,761.4 (62.3)	12,513.2 (29.7)	14,002.7 (9.8)	12,510.3 (▼10.7)	▼0.3
財貨・サービスの輸出	55,282.4 (▼1.9)	65,738.5 (▼2.3)	66,581.7 (1.8)	64,302.4 (▼3.4)	▼0.5
財貨サービスの輸入	45,521.0 (▼9.5)	53,225.3 (▼7.7)	52,579.0 (▼0.1)	51,792.1 (▼1.5)	0.2
国民総支出	502,450.7 (▼2.3)	485,273.3 (▼2.6)	486,029.1 (0.3) (1.3)	481,050.5 (▼1.0) (▼4.0)	-
年 率 換 算 成 長 率	-	-			

策である。年貢半減策は、大和の天誅組の変と生野銀山の変の際にもかげられたと云われるが、相楽総三がこの思想をどこで培ったかという事である。何れにしても、今日(一九九九年度)日本の租税純収入を約八二兆円とすると(公債金約三一兆円を含む)その半分を帳消しにすると四〇兆円の減税ということになって、これだけを収入とすると国家は破滅的となる以外ない。大変なことである。それが相楽の陳情によって太政官がこれを許諾し、その時、相楽に従来の功に対し感状まで下されたということになったのであるから、これも大変事であった。

年貢と平成税収をくらべることは荒っぽい議論だが、趣旨は通じる。

百姓の持ちたる国

◇ 1999 年度一般会計歳入歳出概算 ◇

（単位・100 万円。増減額と伸び率は前年度
当初比＝100 万円未満は切り捨て、伸び
率は四捨五入。▼ はマイナス）

【歳入】	99 年度 概算額	増減額	伸び率 (%)
租税・印紙収入	47,119,000 ▼	11,403,000	▼19.5
その他収入	3,691,122	100,943	2.8
公債金	31,050,000	15,493,000	99.6
合 計	81,860,122	4,190,943	5.4

ノ持チタル国」思想と実践の中に求めることが出来る。これは応仁の乱（一四六七）年による日本政治権力の弛緩と
仏教の衆生済度の思想からできたものであるけれど、一面、一四二八（正長三）年からはじまるとみられる所謂土一
揆の思想的行動的展開から結果したものでもあった。後に東西両本願寺にわかれ（徳川家康のとき）、平成に入つて
両者融合するという一大仏教王国を築き皇室とも親縁する大衆派浄土眞宗本願寺の出發が親鸞から八代に於て、ここ
に全く庶民的農民的血涙の歴史を刻んでいることはまことに大きな驚きである。

それと関連して考えねばならないのは、一五二四～二五年のドイツ農民戦争とマルチン・ルッター（Martin Luther）

年貢半減の思想はまず右の如き種々の困難をその考へのはじめから含むものであるが、
これを実施に移すことは、革命的地盤の形成がなければ到底成就し得ない。しかも革命
政府が出来れば、年貢半減どころか、その革命継続の爲軍事費その他莫大な金円を必要
とすること無論で、結果的に年貢倍、三倍増しになることは必定である。革命政府は民
需極端圧縮で革命維持発展の爲、国民の膏血をしぼるだけしぼりとらねばならなくなる。
革命と年貢半減とは実体この様な關係だろうが、その發生の思想は農民（昭和時代迄
国民の八〇％から九〇％、殆どは農民）の生活を楽にし、武家的政府的規制をとり去ろ
うとするところにあることは云う迄もない。この場合、相楽と太政官のやりとりも明瞭
にこの点を強調している。ここから考えると、こういった一種の共產主義思想は、日本
にその先蹤があり、これを加賀の一向一揆と浄土眞宗本願寺八代法主蓮如による「百姓

説

以下の宗教改革の思想、行動である。ドイツ農民戦争は日本の土一揆と同時代の現象で、その点興味深い。日本の土一揆は、最后織田信長の登場で一応の終止符をうたれる。その間一〇〇年間、この年数もまた興味深い。そしてこの一揆を一応終息する織田軍団の力とそれを可能にした時代背景の探求も決して避けて通れず、また興味津々たるものがある。 (信長は一向一揆とも一五六九年以来一五八〇年まで一一年間闘っている)。

論

これらについてはすこしく後にとりあげることとし、ここでは次に相楽総三と赤報隊と年貢半減政策とのかかはり合いの問題をとりあげる。

第三章 明治維新と農民戦争

相楽総三の生いたち

年貢半減政策というのは、幕末騒擾と討幕舉兵、農村一揆等の頻発で、徳川幕府を倒そうという国民的反幕叛乱の情勢の中では、至極、自然当然に出てきたものであった。江戸、大阪等を除き、叛乱は農村で起っているのです、その結集の為に年貢に手をつけるのが最も捷徑であり、効果的であった。その理由は

①当時日本社会の国民総階層のうち農民が八割から九割という構成であつて、江戸、大阪、京都といったこの期の大都市を除いては国民総農夫といつてよい時代であつた。故に農民叛乱とか農兵隊とかいう言葉が普通用いられて、それはそれで意義をもつが、実体は国民叛乱、国民隊というものであつたことを忘れるべきではない。商家といつて

も地方では半商半農で、酒、油、塩、荒物、雜貨を、資金のあるものが農業の片手間に商うものであり、また農業と直接関係する米穀、雜穀商等があつたにすぎない。

②相樂総三の生家も小島家という農家で、父の兵馬が金融業を営んで財をなしたという。父は郷土身分であつたが、これは、その蓄財を使つての獵官であつたとされる。相樂総三は一家が故郷の下総国（千葉県と茨城県にまたがる）から江戸に出て邸宅をかまえた天保一〇（一八三九）年に赤坂檜町で生れた。一代の悲劇の風雲児の誕生であつた。彼の同志もすべて農村出身者であつたといつていい。幕末はフランス革命、ロシア革命等と騷擾の態様は変らず、大和五条の天誅組の乱（文久三（一八六三）年八月、失敗）、但馬国生野銀山舉兵（右と同時期、失敗）、赤城山蜂起の計画（右同、十一月一二日、中止）、筑波山舉兵、藤田小四郎、武田耕雲齋、田丸稻之衛門等の天狗党（元治元（一八六四）年三月、慶応元（一八六五）年二月、敦賀にて潰滅、武田耕雲齋等斬刑）、等と一寸指を屈しただけでもこれだけ大騷擾が出て来る。そしてこれらには、各藩士、脱藩浪士等のほかに任侠集団、農村出身の所謂革莽の志士等が多数参加していた。従つて各義舉の地盤は農村にあり、そこに国民的反幕の氣風と運動が醸成されていたとみなければならない。農民全般が国民全般であつた。

③これら農村叛乱を計画する各叛乱組の組織も前記勤王諸隊とは別の異なるものとして現れた。それらは下克上の革命的農村叛乱と言え、明治維新に於てもそうした下からの騷擾が萌芽的にまた種々な行動との抱合の中から変革的にあらはれていることを知るべきである。慷慨組、埼玉県豊里村の桃井可堂（儀八）が首領となつて前述赤城山舉兵を図つたもので、農村の有力者を中心に叛乱組を組織した。これは長州藩士大楽源太郎等が加わり、広く農村から参加者を募つたが、有力者が先登にたつたので多数が集まつた。これらの指導農民は、農業を営むと共に藍玉商、荒物

説

商、米穀商、塩商といった業務に手を染めていた。商業移動を活発化する為には封建的枠内でその規制を受けていることはよくない、という思いも強かったと思はれる。彼等は上州（群馬県）赤城山によつて国定忠治よろしく一擧の兵をあげようとした。

論

天誅組、右と呼応して、同村内の声望家尾高新五郎、長七郎兄弟が中心となつて叛乱組織天誅組が結成された。これは勇ましい計画で進んで高崎、横浜に出、高崎城を乗取り、横浜洋館の焼討ちを決行して攘夷の実を具体的にあげ、その功を天下に示さんというものであった。これらには尾高一族、渋沢一族等の豪農も荷擔しており、天誅組決起には若き日の渋沢栄一も参加することとなつていた、という。

この洋館襲撃についていえば、これは現実具体的な攘夷決行としてさかんに行われたがその理由は神州を夷敵にけがさすなというナシヨナリズムの狂熱もさることながら横浜開港と共に市街が整備開発され、多数の内外人が謂集し、外国貿易がさかんとなり、

①生糸、茶、米、呉服、綿、炭、酒、砂糖等が或いは輸出され、或いは横浜に多く買い占められて江戸市中物資払底となつてインフレがはじまり、たちまちこれが猖獗した。

②その影響はすぐさま全国的となり、景気の好い横浜に物資が流れこんで江戸の問屋や仲買商は横浜に商売を奪はれ、上州（群馬県）京都西陣の機屋等も原料不足をきたして困難した。生糸改会社の横浜商人に対する反感も強く、関東の養蚕製糸地帯でも横浜開港で利益を受けるより、市場組織の変化や価格の変動で競争にとりのこされ、不利益を蒙る者が意外と多かった。

③日本の銀価が安く、これを多量に購入して、銀価の高い他のアジア諸国に売つて差額を儲ける銀買いが外商の手

で盛行し、日本の銀の流失は多額にのぼった。

こうした理由から横浜焼討ち、外人殺傷がさかんに行はれ、また叛乱の目標となった。生麦事件、ヒュースケン（Heusken 前稿）、英国士官ポールドウィン（P.W.Baldwin）とバード（R.N.Bird）の暗殺、東禅寺英国公使館襲撃等が就中名高い。

狂風ナショナリズムがその背景にあり、英国陸軍少佐ポールドウィン、同中尉バードの暗殺でも犯人は中々あがらなかったが、清水清次という者が捕縛された。彼が果して眞犯人であつたかどうかという説もあるが、この人間は処刑に際し黒の紋服を役人から貰い受けて着し、清酒一升を請うてこれを一気に呑み干し、馬で神奈川の街を引まわされてその翌朝、戸部暗坂の芝地で斬首された。夥しい群衆で刑場を十重二十重にとりまいて立錐の余地もなかった、という。この群衆を前に清水清次は外国に恥をかかないとして目かくしを拒否し、死に就いた。この記録は戦時中戦意昂揚の為小説化され、彼が捕縛されるとき、火消しの組中が集まり、印半纏（ハシタマシ）の正装で木遣（キヤリ）を唄って彼を町内から牢獄に送りこむという情景設定となり、それが感動的に描かれた。これは彼の偽犯人説にたっている。

横浜にいち早く開かれた妓樓に外人はしげしげと登樓して日本人をひんしゆくさせたが、その中、岩亀樓の喜遊という芸妓の様に外人を拒否してゝ露をだにいとふ倭の女郎花降るアメリカに袖はぬらさじ、と詠んで自殺したというすさまじい話もあらはれた。

しかしこの期これらの蜂起は多く計画倒れとなつて中止に追いこまれた。それは文久三（一八六三）年八年一八日の政変の影響が大きかった。即ち宮中に威力を張つていた尊王攘夷の長州藩が公武合体、和宮降嫁によつて勢力をそがれ、薩摩、会津両藩や中川宮朝彦親王等の勢力によつて宮中と京都から追放され、これによつて尊皇攘夷派は大打

撃となつた為であつた。この政変は尊攘派公卿三条実美以下七名の長州落ちとなり、翌元治元（一八六四）年七月の長州藩東上、宮中乱入を図る蛤御門の戦いとなり、更に有栖川宮熾仁親王以下一五公卿の参朝停止と発展してゆく。こうした尊攘派にとつての冬の時期到来と共に、これらクーデター計画は中止の止むなきに至るのであつた。

眞忠組

この中で同じく千葉県九十九里地方で、楠音次郎が首領となつて、水夫や農民を集め、尊皇攘夷運動を起こすという眞忠組が組織された。そしてこれだけが計画を実行に移した。このクーデター計画は多分に所謂農村一揆的性格を帯びていたかと思はれるが、同志は二百人から数百人を集めた。これは決起の日を文久三年一月二日と定めてそのとおり起ち上がった。しかし他の決起がすべて中止に追いこまれる中で、しかもこれだけの無勢では如何ともし難く、翌元治元年の一月に入るや作倉藩や近隣諸藩兵によつて庄殺されてしまった。

④この期右に点綴して、一揆的性格をもつ農村叛乱も一、二に止まらなかつた。それは、地主、豪農に対する打毀し等として発生し、大規模なものもあり、その目標として地主に対する借金棒引きを要求し、また質地証文の焼捨てを強要した。

（イ）武州一揆、慶応二（一八六六）年六月に秩父の山村名栗村から勃発し、これは追々と広がつて、それが所沢に至る間に一揆勢一万人にも達した。その背景には林業や出稼ぎ家庭で米穀を商人から購入しているものが多く、商人の投機や買い占め、価格のつり上げ等によつて貧困が倍加した事、また長幕軋轢から幕府の長州征伐となり、その賦課金、夫役の増大が起り、道路整備、警固、荷役、運搬等、かてて加えて幕兵の滞在費で米価急高騰、インフレとなり、庶民の生活を圧迫したこと等があつた。

（ロ）この上慶応三年上州南部の前橋の打毀し、翌四年二月の戊辰戦役農民叛乱等も起っている。これらの鎮庄に幕府は手を焼き、硬軟両様の対策で特に備穀の充実を図り、眼には眼を、で所謂農兵隊を種々編成した。

農村騒擾と年貢半減

右述の農兵、一揆等はみられる如く農村から起っている。幹部は水戸藩士、地方脱藩士などの場合もあるが、その中核をなすものは農村出身の志士、革莽である。例えば相楽総三の編成した赤報隊でも幹部は副総裁の落合源一郎（直亮）が埼玉県多摩郡小仏峠関守の子であり、大監察権田直助が医師で古医道の組織的研究を心がけていた等を例外として地方脱藩士か農村出身者、半農半商出身者で占められている。

慶長三（一八六七）年七月頃からはじまった「ええじゃないか」（法学研究所紀要二八号、拙稿参照）もその主流は農村地帯で名古屋、吉田宿、三河、遠江、金谷宿、駿河から京阪神のそれらとなつて、農村地帯の御鉾祭りという群集乱舞の行事とかかはっている。名古屋、京都、大阪などの都市もまきこまれているが、京都等は皇城の地としてかえつてこれが大いに起つた。こうした現象は、当時国民階層の殆どが農民であるから言う迄もないことで、この意味では京阪神、江戸、横浜の商家、貿易商、機織家等は一応その埒外にいたといえる。

相楽総三自身が農家郷土の出であるから云う迄もないが、こうした環境で農村地帯を主として反幕、討幕運動を展開するとならば、年貢半減策をかかへて進軍するのが最も効果的で目的達成の最捷徑であることは、当然、自然に彼等の間に出てくる。赤報隊は、これを相楽だけでなく、全員が信奉して進撃していることは、相楽が隊を留守にして

説

いる間にも隊士によってこれの布告、実行は守られていることからよくわかる。年貢半減というのはこうしてかかる環境の中でごく自然にあらはれ出た政策であつた。

論

これは先にもふれた一向一揆や、「百姓ノ持チタル国」建設の意識、運動とまさに表裏をなすものである。つまり農村地帯に於ける叛乱、一揆はすべてこの道をとるということであろうか。ここで、これら叛乱、一揆の性格から一向一揆の探查にすすむべきであり、そこに農民戦争、農村共產主義体制といったものが、意識、イデオロギーとして存在したのかどうかということは、興味ある大きな問題であるが、それらは後にとり扱うこととし、ここではまず、年貢半減策と赤報隊の事跡の結果に一応眼をうつすこととする。

相楽赤報隊の進軍

さきにのべた綾小路隊と滋野井隊と相楽の赤報隊が松尾村出發に当り三つにわかれたのは、滋野井卿がこの間戦意喪失で、毎晩泣き出して誰の忠告もききめがなく、これがアトに残されることとなつた故であつた。綾小路隊の中で相楽赤報隊は一月一二日に他に先がけて信州方面に先遣嚮導隊として出發した。そのあと急に赤報隊につきよからぬ噂が流布された。それはこれが諸々に押し込みを行つて各藩陣屋や、富家、豪農を犯して金穀を強奪しているというのであつた。赤報隊の名を偽つて強盜するものもアトを絶たなかつた事は事実とされるが、それは前述の江戸御用盜便乗盗人の場合と大差ない。この為滋野井、綾小路両隊に帰洛命令が出て綾小路隊は先発の相楽赤報隊に急使をたてて直ちに帰洛する様にうながしておいて自身は名古屋へ出、そこから無事京都に帰りついた。二月初めの事であつた。

後発の滋野井隊が、このとき大災厄を蒙る事となった。即ち滋野井隊すべてが桑名で伊勢亀山藩に捕縛されて八名斬刑、二十数名追放となったのである（偽官軍事件）。滋野井卿だけは無事に帰洛した。この公と綾小路（生家にかえつて大原という）はこの后東北鎮撫隊に属し、明治となって両家共伯爵を授けられた。赤報隊というのは綾小路、滋野井両卿の隊を再編成したときに相楽がこれを命名したので、赤報隊というのはこの両卿隊のことであつた。しかし結局滋野井隊は桑名から四日市へつれてゆかれて断罪潰滅し、綾小路隊は無事帰洛してこの赤報隊も解散、霧消したのであつた。従つて、当然残つたのは相楽総三赤報隊だけとなつたのである。

相楽総三の独断専行

この相楽赤報隊がこうした赤報隊に対する仕うちの中でひとり信州へおもむいたのは、相楽総三が自身の主張をまげないで押し通したからに他ならない。こういうところに相楽総三のキヤラクターがある。さきにも水戸天狗党の擧兵の際、相楽は藤田小四郎の陣営に参加したが、長くもおらずにそこをはなれている。それは『あらゆる政治行動を藩政府、御三家水戸とかかわりに於て思考し、それが益々尊攘運動自体を藩内党争にすりかえていく水戸尊攘派には堪えられず、袂を分かつてしまう。後年、薩邸時代の四郎（相楽総三のこと）の同志蜂尾小一郎の語るところによれば、『藤田小四郎の策が徹底を欠いているので山を下つて去られた』のだそうである。』（『維新史の再発掘』）相楽総三と埋もれた革莽たち――高木俊輔、NHK出版、五四頁）ということと相楽総三がすべて自己中心主義に改革を考へるといふ態度であつた事があらはれているのを好意的に解釈すればこういう描写となるので、尚、相楽に一月二

説

論

五日、京都系赤報隊から信州入りを断念して帰洛する様に命令的勧告があつたが、相樂はこれに反対して「今急に進軍して一方は甲府を一方は碓氷峠を扼さないでは官軍の不利となります。譬へ、後に軍令に反したといはれても、實利の要地を押えないでどう致しますか、相樂は名聞も榮達も考えていません。徳川氏が信州甲州の嶮を扼し、錦旗に抗したら日本はどうなりますか、今は区々たる一身のことを考慮するときではありません」と堂々の論陣をはつて命令をしりぞけ、信州に向かつて出発したのであつた。相樂赤報隊の信州独行にはこういう事情があつた。このことは相樂総三のみならず当時のまた日本一般の革命を考えると、そしてその實踐者の心情を分析するとき重要なので、後にまたこれにふれたい（長谷川伸、前掲書、四〇六頁）、相樂赤報隊をめぐる、かえれ、かれらぬ、の問答はその後もつづき、仲牟田尚平、落合、権田等が機を得て相樂に直接又は隊士を通じて帰洛する様説得しようとしている。しかし相樂はがんとしてこれに応じなかつた。

第四章 追分戦争（一）

相樂総三総裁

追分戦争というのは長谷川伸がその著書の中で使っているの、そのまま用いる。信州追分で相樂赤報隊と小諸藩、御影陣屋等との間の血戦のことである。

相楽総三について、このところまでは、別段大した疑義も不可解もなしにその活動を描寫出来るのであるが、ここから先は一寸イケない。彼の行動は不可解というより他はない仕儀となる。相楽総三とその赤報隊は天朝の御為に決起し、勤皇の志士として身を挺して活動したが、その挙句、味方の筈の東山道総督の裏切りによって命をたれることになり、その事蹟をあらはす為に彼の遺児（孫）が貧窮の中から努力して最后、勤皇誠忠の士として正五位にのぼせられたその歴史に涙した長谷川伸が、彼の麗筆を以て、その間の動向を一冊の書物とした。「相楽総三とその同志」である。長谷川伸万斛の同情と涙を以て、得難かった資料を発掘し、これを細密に分析してこの一冊は成った。記録文学の巨編である。

そのことに異論はなく、何の論難のなきことはいうまでもない。しかし赤報隊をあずかる総裁、もしくは大将、隊長としての相楽総三ということになると話は別である。同情を以てすべてをおおい得ない。長谷川伸の一冊以来相楽総三は世にあらはれ、研究書に、種々の書物に、また演劇の上演にといはば引張りだこである。それ故眞実の科学的探求の必要はまさに客観的ならざるべからざるものがある。

相楽総三とその赤報隊は右述のいきさつから綾小路、滋野井両卿が帰洛したのに反対して信州の方へ進んだ。そして二月二日から伊那谷郡へ入り、飯田、山吹と進んで六日に下諏訪へ到着した。そのとき隊士約三〇〇人で鉄砲隊五、六〇人、相楽大將は黒い馬にまたがり、緋の陣羽織、ゆんでに鉄扇をもつて威風あたりを払っていた。馬上につき従う幹部五、六人、「官軍先鋒嚮導隊」と誌した大旗をたてていた。この旗でみなが恐れ入った。その他長持三棹、彈薬四荷、荷馬三駄もひいていた。一行は宿本陣の亀屋に宿泊。その玄関口に左の告文を大書したものを布告文としてかかげた。これは赤報隊が処々でたてたものと同一であった。

高札

一、今度王政復古に相成、御政事向、都テ於御所被遊御取扱ニ付テハ

朝命ニ不服者等御追討トシテ、官軍御差向ニ相成候ニ付、百姓町人共ニ安堵致、各職業可勵候事

一、官軍御差向之儀ニ付、其混雜ニ紛レ、官軍ト偽リ、暴威ヲ以テ、百姓町人共ニ為難儀候者有之哉モ難計候間、右等ノ者ハ取押置、本陣ヘ可訴出事

一、徳川慶喜儀

朝敵為官位被召上、且從來御預之土地不殘御召上ニ相成、以後ハ

天朝御領ト相成候、尤是迄慶喜ノ不仁ニ依リ、百姓共ノ難儀不少儀ト被思召當年半減之年貢被下候間

天朝ノ御仁徳ヲ厚ク相心得可申、且諸藩之領地タリトモ困窮ノ村方ノ者ハ、申立次第天朝ヨリ御赦可相成候事

事

官軍 赤報隊 執事

まさに相樂赤報隊一世一代の晴れ姿というもむべなる有様である。一五代將軍を慶喜と呼び捨てにし、朝敵でいまい文無しの素寒貧であると罵倒して、天朝の政事回復と徳をたたえ、年貢は本年は半分でよいと布告した。同じことは他の赤報隊でも起っている。相樂の手のものであった大木四郎、西村謹吾、竹内建介、桜井常五郎、神道三郎の五名が翌七日上田城下に入ったときも相樂本隊と同様美々しいでたちで、陣羽織、筒袖の衣服、緞子の袴、白鉢巻

の切下げ髪で五名共に早駕籠をうたせ、大刀を抱いていた。

ここいらが赤報隊の最盛で、これら五人が街に入ったときは、官軍がきたというので人々はどよめいて迎え、宿場役人、両問屋、町年寄等が正装で出迎え、彼等は宿へ入ると、中之條陣屋、上田藩、飯山藩本多家等から家士が挨拶に出向いた。翌日仲之條陣屋へ矢張り駕籠でおもむいたが、昨夜にまさる見送りであった。陣屋の役人が数名付添っていた。付近は高崎藩八万二千石松平右京亮輝照が最大藩で、他は一萬石、二萬石の小藩であった（五〇萬石等に比べれば）。この五人は手分けして小幡藩、吉井藩、七日市藩、小諸藩等へ出向いて勤皇の誓約をとりつけ、また金穀の寄付を要求した。ここまでは見事な応接であったが、このアトがイケナイ。所謂追分戦争が起つて相楽赤報隊は潰滅し、戦死が続出、逃散したものはきびしい追求で、或いは討たれ、或いは捕らえられて斬刑された。大体このとき全隊三百人位というが、この様になった。

隊には全体の統制とか軍律というものがなかった。つまり戦闘についてである。統率、隊伍、分擔、攻撃、防禦、武器、偵察といった組織が全くなかった。ただこの大木四郎、西村謹吾、金原忠蔵、神道三郎等の隊が二月一五日、碓氷峠へ上つてきたときは総勢七〇人、小銃二〇挺、槍六本、馬三頭をひき、官軍先鋒嚮導隊本部、大砲組、監軍隊、探偵検査掛、応接掛、小荷駄司令、金穀出納役、遊撃隊、小銃組といった戦闘組織をつくつて敵にそなえていた。これはこれで立派なものであったが肝心の相楽総三の赤報隊全隊にこれがなかった。それでそういった隊伍の演武や演習なども全くなかった。相楽赤報隊には、総裁、大監察、監察、監察使番、使番、といった隊幹部名表とその連絡組織があるだけであった。人は集めるがそれを隊に組み、舉措、進退、攻撃、防禦等の訓練、図上作戦、演習を行うといったことはなかった。

碓氷峠の赤報隊

相楽赤報隊は軍隊ではなかったと言はねばならない。武器をもつて脱藩浪士や郷士、農村出身者、俠客等が集まった烏合の衆であつた。

そこで、この碓氷峠へ集まった人々は右様状態の中で四つの隊に分れてしまった。即ち大木隊、金原隊、桜井隊、そして丸尾隊である。これも夫々各々が独自の判断でそうなつた。統制脈絡があつたわけではない。で、これは敵に襲はれてたちまち敗北し、支離滅裂となつて全滅したのである。

最も問題なのは、相楽総三がこの迫分戦争とその後陣に隊にいなかったことであつた。これはどうしたことであらうか。隊長が不在で、各人はテンデンバラバラに離合集散して統一戦線を自らといて四つに分れ、分断各個撃破の格好の目標をわれから提供して敵兵の餌食となつてしまつた。味方を分つて戦線に送りこみ、前線でこれを素早く統一、中央突破で敵軍を分断してこれを全軍で各個撃破する。敵より早いスピードで移動し、敵より多くの人員を一点に集中し、敵より多くの武器、弾薬を集める、というのがナポレオン戦術以来の白兵戦の要諦であつたが相楽赤報隊は、その裏をゆき敵軍にそれを許す行爲に出してしまったのであつた。何とも言い様がない。

(イ) 相楽総三は再三の帰洛命令を無視して碓氷峠へ出向してきたのであるけれど、肝心の戦争のときに隊長がおらぬということになつた。それに相楽総三が予想したとおりに戦争が勃発している。そこまでみとおしていながら實際戦闘に具体的にもそなえていないのである。

（ロ） 相楽総三は、下諏訪へ入った二日後の二月八日、東海道総督橋本實梁から呼出し状を送達され、九日に下諏訪の本営から大垣へたつた。あれだけ総督府の命令にそむいた人が、何故唯々として今回は呼び出し状に応じたのか。これにつけ種々の角度からの維摩憶測があつたろうに、ことはあまりにもアッサリ出頭に決している。

（ハ） しかも相楽総三が大垣の総督方に出頭したのは二月十九日（下諏訪へは二三日に帰りついた）ということである。その間彼は何をしていたのであろうか。また何処におつたのであろうか。これにつき彼は京都へ上り、太政官に赤報隊の「官軍の御印」を下付される様に陳情におもむいていた、という説がある（『維新史の再発掘』高木俊輔）。これが事実とすれば、それはどういうことであらうか。相楽総三は、碓氷峠に戦争にいくというのは單なる口実で、彼自身戦争など意中になく、あるのは赤報隊の官許公認だけだった、ということになる。何ともあやしい話である。事実前述の如く相楽隊長不在の間に、赤報隊は現地で攻撃され、誅滅せられてしまつてゐるのである。これから一寸相楽総三という人の性格や目的については、輕々に付度の限りではない。このていたらくでは、これを軍刑法に照らすとすれば、敵前逃亡罪にもあたる。

（ニ） 相楽総三が下諏訪の本営にかえりつくのは二月三日という。そして同志の死に痛憤し、とらはれていた生残りの隊士の釈放と助命に奔走する。この行動が相楽総三の義舉の如くとりあげられている。しかし本営の同志は数十人いたというが、これをひきいて復讐の一戦、弔い合戦に及ぼうという氣風は全然ない。

捕らはれの同志は一旦釈放されて下諏訪の本営に帰着して一同大いに喜ぶが結局すべては太政官の奸計にのせられて一括捕縛され、斬刑の上さらしものとされるのである。ここいらが、相楽総三と埋れた革莽の同志たちということになるのである。

勤皇隊抹殺令

右述の如くにして赤報隊の分遣隊は碓氷峠へ集まったが、このとき下諏訪の本隊の方では大變が起っていた。即ち二月一〇日付で、ここで愈々太政官は赤報隊を誅略してしまえという態度を決し、その手筈にとりかかつてそれが本隊にもれたのである。それはこの決定が京都へいつていた同志の竹貫三郎の耳に入つて、この人が仰天してこの事を宙を飛ぶ如く駆けにかけて下諏訪へ注進したことからであつた。それが二月一三日であつた。本隊の面々の驚愕は天地がひっくりかえつた様で、收拾つかない大混乱となつた。天朝忠義の心で集まり、身を捨てて日夜粉骨碎身の努力を傾注し、愈々目的を達しようというときにこの悲電である。総員腰が抜けた様になつたのも無理はない。とにかく一同この誤解をとく為に謹慎するのが上策ということに決し、碓氷峠の分遣隊へ使者がたつた。二人別々にたつた。しかし一人は早くも途中で捕縛され、この報が碓氷峠へついたのは七日午后になつてからであつた。

この赤報隊誅滅の回章は次の如きものであつた。

回 章

高松殿京都御脱走ニテ人数召連し、東国へ御下向之處、右ハ決テ勅命ヲ以テ御差向ニ相成候義ニテハ無之、全ク無頼ノ奸徒、幼稚之公達ヲ欺キ奪出シ奉リ候義ト察シ候、右無頼ノ者共、當総督様の先鋒と偽り、通行ノ道々、金穀ヲ貪リ、其他如何様ノ狼藉可有之哉、難計候ニ付、諸藩イヅレモ此旨篤ト相心得右等ノ徒ニ欺レ不申様

可仕候、尤右公達ニ於テハ卒忽之義無之様可仕候得共、人数ノ義ハ夫々取押へ置き、総督御下向之上、御処置相伺
ヒ候様可仕旨御沙汰候事。

附、先達テ綾小路殿御手ニ属シ居候人数、綾小路殿既ニ御帰京ニ相成候後モ、右ノ者共無頼ノ徒ヲ相ヒ語ヒ、
官軍ノ名ヲ偽リ、嚮導隊忤ト唱へ、虚喝ヲ以テ農商ヲ劫シ、追々東下致候趣ニ相聞エ候、右等モ高松殿人数同様
之義ニ候間、夫々に取押へ置き可申旨、被御出候事。

二月十日

総督府執事

とあつて、太政官がここへきて忠信義士を名乗る天朝方諸隊（前述のもの等）を悉く抹殺誅滅してしまおうという
態度、政策となつたことがこれに示されている。これらについては後にとりあげる。

第五章 追分戦争（二）

軍部大臣現役武官制

ボルシェビイキ革命時のそれとメンシェビイキの争い、フランス革命時の山嶽党（*Montagnards*）、ジロンド党
（*Girondins*）、ジャコバン派（*Jacobins*）等の対立、第一次世界大戦后、ドイツ・ナチス出現時の鉄兜団、人民党、社

説

論

会党 (Stahlhelm, People's Groups, Socialists) 等種々の党派が夫々の激動に煽られて出現し、夫々対立競争したが、これらは夫々各々の間の中で收拾されてゆく。日本の様に政府若しくはその有力支持組織が權威的に他の類似競合団体、組織等を圧伏、政府統制下にこれらを抹殺統合することは無かった。これも後にとりあげるが、日本を太平洋戦争に導いてゆくのも陸軍が強い統制の下に軍内諸派軍外右翼諸団体等を圧伏その指揮下にこれらを統合、目的に向つて牽引してゆく。これも日本政治の權威主義、上からの変革の一大特徴であつた、と言はなければならぬ。日本の変革は多くこの様な類型をとる。大化の改新(六四五)、保元の乱(一一五六)、承久の変(一二二二)、建武中興(一二三二)、明治維新とあつて中大兄皇子(天智天皇)、後鳥羽、土御門、順徳各上皇、後醍醐天皇、孝明天皇がこれら變動の中核をなした。これについては前稿(法学研究所紀要第二八号)にとりあげたので繰り返さない。二・二六事件に於ては、陸軍部内に統制派と皇道派の二大派閥の抗争があり、権力基盤を固めた統制派が皇道派を圧迫し、ここから皇道派の領袖眞崎甚三郎大將を教育総監の地位から追放したことが引き金となつてその幕下の所謂青年將校がクーデターに立ち上がったものであつた。一九三六年二月一日、彼等は雪の帝都に叛乱を起し、時の岡田啓介首相以下内大臣斎藤實、蔵相高橋是清、教育総監渡辺錠太郎等を襲撃して後記三名を殺害した。その為全皇道派はこれを契機に抹殺され、統制派が陸軍部内の統制をとつて、その力を政治に振り、遂に東条英機陸軍中將が内閣首班の印綬を帯びて昭和天皇に地下草の忠節を捧げ、そこから太平洋戦争を導き出して大日本帝国の亡国を結果したのであつた。

この上からの変革が尤も効率的であり、目的達成の捷徑であることはいうまでもない。この陸軍の統制は、しかし既に早い時代から心がけられていた。その原初はその限りに於て永田鉄山の組織であり、これが第一次世界大戦中、南独のバーデン・バーデンに会合した岡村寧次、小畑敏四郎という三少佐の会が陸軍をこれら三人の力の下に一体的

に組織しようとしたものであった。これがその後順調に発展して陸軍統制派の一大組織にふくれ上がるのである。永田鉄山は陸大主席卒業、彼があらはした「総力戦に関する報告書」は宇垣一成をしてルーデンドルフにまさるとも劣らぬ見識と舌をまかせ、東条英機もこれを読んで、陸軍にはこの人を置いて師表たるはないと三嘆したといわれる。石原莞爾同様ナポレオン戦術の研究家で、日本の中国侵略には、ソ連にそなえて戦線不拡大を包摂していた。昭和一〇（一九三五）年八月皇道派の相沢三郎中佐によって白晝軍務局長室で斬殺された。

ちなみに皇道派は陸軍三長官（陸軍大臣、参謀総長、教育總監）を歴任した陸軍希有の人材と評された上原勇作元帥の傘下に集まった人達の呼稱であった。上原元帥は天皇への帰依は超絶的で、天皇の軍隊の中でもぬきんでて天皇主義であった。ここから皇道派の名起る。上原勇作は陸相のとき、陸軍二個師団増設問題で議不可となるや、首相西園寺公望の頭越しに單獨で閣下に辞表を捧呈し同内閣を崩壊させた（大正元（一九一二年）二月五日）。これは、陸軍官制の「軍部大臣武官制」の為であった。即ち陸海軍の同意がなければ内閣は軍部大臣を得られなかった。軍部大臣を欠いては内閣は成立も存続もできない。「軍部大臣武官制」は、一旦山縣有朋がこれを廃止し（明治二四（一八九一）年七月）、また復活し、復活した時には條件が加重され、従来「將官」に限るとされていたものを「現役將官」に限る、とされ、これは更に大正二（一九一三年）三月に山本権兵衛内閣のとき「現役」が削られた。しかるに広田弘毅内閣は再びこれを「現役」に限るとして陸軍の政治関與、統制を万磐のものとした。「軍部大臣現役武官制」は陸軍の立憲政党政治覆滅の一大横杆と作用した。

改革、変動を上から行う。これが日本政治変革の眼目であった。勿論、ナチス・ドイツもムッソリーニ・イタリアも彼等が政権を手中にすれば、反対派を圧伏整理して一党独裁という名のヒットラー (Adolf Hitler) 、ムッソリーニ (Benito Mussolini) 独裁を確立する。しかし政権への闘争は彼等は下から民衆をデコに行う。

ヒットラーの場合は、ワイマール共和国 (Weimar Republic) の選挙制度の中で合法的政権樹立を目指す、ベルサイユ体制の破壊、ユダヤ民族の排除、ドイツ人の最優秀民族性 (アーリア人 Aryan) 、ドイツ生活圏 (Lebensraum) の確保、ドイツの伝統・歴史の尊重、自由放任主義、議会主義の放棄等をスローガンとして幅広い民族運動を展開し、一九三二年七月三十一日の総選挙で六〇八議席中二三〇議席を獲得して第一党となった。ヒンデンブルグ大統領 (Paul von Hindenburg) 、その側近であったシュライヒャー大將 (Kurt von Schleicher) 、パーペン (Franz von Papen) 等のヒットラー阻止活動も議会制度第一党の前には所詮むなしく一九三三年一月三〇日、アドルフ・ヒットラーは遂に大ドイツ国宰相の印綬をおびることとなった。この間、ナチス突撃隊、同親衛隊等は続々ベルリンに蟬集し、あはやクーデターかと人々を恐れさせたが、ヒットラーははやる隊員達をおさえて暴発しなかった。これは彼が一九二三年一月八日ミュンヘンで武力クーデターを起し、忽ち一敗地にまみれてナチスの潰滅的打撃を蒙ったことを教訓としていた為であった。彼は言った。「武力は脅威する為のものだ。伝家の宝刀は抜いてはならない」と。

ムッソリーニの場合はもつと直接的であった。ファシストの先輩として彼はイタリア政界で一九二二年一〇月クーデターに出ていた。ヒットラー、ムッソリーニ共に共産党との対決抗争の中から政権への道を切りひらいてゆくが、労働者に対する態度は二人に於て相違する。ヒットラーはミュンヘン一揆の後、軍と労働組合の二つを敵に回し

てはならないことを彼の政治哲学とするが、ムッソリーニは当時一年に千数百回もそれ以上もあれ狂っていたストライキとの闘い、これを打破ることを任務とした。一九二二年七月イタリア労働界は、遂にゼネストを以て王制と政府に戦いをいどんだ。九月ゼネストは最高潮に達し、ムッソリーニのファシスト党はゼネスト破りに狂奔した。イタリア各地でファシストの集会が開かれ、人々は、ムッソリーニのクーデターが何時火を吹くかと固唾^{カッス}をのんだ。事実一〇月彼の黒シャツ党五万がサンタ・マリベラ、チボリ等三方からローマに殺到した。「ローマ進軍」がはじまったのであった。

最後の戦いを決意してファクタ (Luigi Facta) 内閣は王に戒嚴令の布告を要請した。王 (Victor Emmanuel III) はこれを拒否し、後継サランドラ首相 (Antonio Salandra) のムッソリーニとの交渉も破れ、遂にイタリア政界はムッソリーニ首相の就任を王に要請するに至るのであった。王はこの段階でいち早く、ファシスト党との抱合を断行してその政権成就への道を開いてやった。これ昭和天皇と東條首相との関係を髣髴させる。

ヒトラー、ムッソリーニ共に下からかけ上がった政権の座に到達したのであった。

レーニン (Vladimir Ilyich Lenin) については前稿にもふれたので、ここでは割愛するが、彼はメンシェビキ (Menshevik) その他と闘いながら、一九一七年二月二三日 (新暦三月八日) 勃発したペトログラードの民衆蜂起を組織してケレンスキー (A.F. Kerenski) 内閣、ツァーリズムと死闘をくりひろげてボルシェビキ (Bolshevik) 政権を樹立するのである。彼のソビエト国家は以后七〇年間の命脉を保つ。

大黒屋討入り

碓氷峠の方ではこのとき、赤報隊も諸藩もこの二月一〇日付の回章を未だ知らなかった。そこで二月一七日、官軍が碓氷峠へ入ったというのを聞いて、近隣諸藩、小幡藩二万石、吉井藩一万石、その他二、三藩が赤報隊へ出向いて挨拶した。しかしそのアトで飛電が到着、また小諸藩へ回章がとどいた。大変事となった。大木隊は、軽井沢へ下った。桜井隊は、そのときそこへ来合はせた源ノ千代丸主従（白川神祇伯の子息）等数名と赤報隊分隊をひきいてこれも軽井沢へ下った。隊員丸尾清と北村与六郎は横川の関所（安中藩所管）を明け渡さしにいつていた。

回章をみて小諸藩は謀略に出、中之條陣屋で騒擾が起つたと噂をまいた。これに引かかって金原隊一二名がこれをしずめにゆく、とて追分へ下った。赤報隊すべてバラバラで軍隊の体をなしていない。小諸藩では謀略の一方、家中一〇〇名、農村、博徒等民兵二〇〇名を集めて銃装してまず追分の金原隊を討ち、勢力を二分して他を討とうという計画をたてた。これらは御影陣屋との共闘である。その他近隣の岩村田藩、上田藩、龍岡藩、安中藩等へ助力を依頼した。これら諸藩は只今参上をくりかえし、結局参戦しなかった。

小諸藩のうち二〇〇名は追分に下り、金原隊と地元の勤皇家二、三とがとまった大黒屋を包囲した。一七日の夜である。二〇〇名は鉄砲を打込んで攻めた。引いたり出たりしているうちに十数名の金原隊は討たれ、逃散し、金原忠蔵もここで討ち死となった。一八日夜明け、軽井沢の大木隊、桜井隊は追分で戦争だということで、朝飯を急遽つくらせ終ったものから追分へとび出したが、彼等がついたときには闘いは終つて金原隊は潰滅していた。

赤報隊というのはこういう集団であつた。軍隊というならまことに奇妙なそれであつた。第一がさきにのべた相楽総三が戦闘のときに隊にいなかったことである。まことに不思議な隊である。

二、それにつれてこの隊は凡そ討伐とか戦闘とかの計画もそなえも実行も何もなかった。大旗を押したてて幕府諸藩に出向き、官軍先鋒嚮導隊の名で、勤皇の誓約をなさせ、金穀を献上させるのみであつた。それが任務の如くである。

三、相楽総三の信州行は自らの独断決行であつたが、この二月八日に東山道総督府の官軍回章によつて碓氷分遣隊は態度一変し事態甚だ非友好で深刻であるから下諏訪へかえつて謹慎しようということになり、忽ちみなこれに同意して下山した。赤報隊の目的は何だったのであるうか。これが前衛的革命党でなかったことは明らかな様である。徳川幕府とその諸藩に敵対してことを起そうというのはわかるけれど、これも如何にして行かうかという上官軍の一員となつて行かうというそれだけであつたらしい。徳川慶喜の大政奉還が慶応三（一八六七）年一〇月であるから、その前後徳川氏の命脉がつきたことはあきらかであり、その前年には第二次長州征伐で徳川幕府は手痛い敗北を喫しているので、このとき徳川方になつて事を起そうという方が余程決心がいったろうし、決死を覺悟しなければならなかつたであらう。

しかしさきの四隊は、金原隊以外も夫々の場所で幕府方の為に或いは討たれ、或いは捕らはれて後、斬刑にあつたりしている。逃散したもの、或いは死を免れて放たれたものもある。その概要は畧するが、大木隊は、金原隊の潰滅のあと、岩村田藩にとらえられた。逃散したものを除いて一八名、小諸藩からの引渡し請求を岩村田藩は拒否し、

説 彼等は一旦の延命を得た。

そこへ相楽総三が帰ってきた。下諏訪へ帰ってきて本人もそれを怪しまず、他の隊員もあやしんでいない。殺戮と捕縛、斬刑がすべてすんでしまったアトである。六日のあやめ一〇日の菊というが、相楽総裁はこれら犠牲者にどんな気持をもっていたのであろうか。

この人は二〇才で私塾を開き門弟一〇〇人を数えたという秀才であつた。その塾をしかし二年程でとじて、その後、父から五千両、三千両と引き出して、前記の筑波義舉やその他の蜂起計画に参画して同志を集めていた、という。しかし京都にいたとき七、八両の金を実家に無心したりしている。学識は深く、その詠まれたすぐれた歌なども残っているが、「華夷の辨」という書をものし、これが長州毛利敬親侯の眼にとまりその跋文を得た、という。中華思想を日本に及ぼし、日本中華の思想をといたものというが、その本は残っていない。

下諏訪へ帰った后、捕はれの同志の釈放、救助運動に挺身している。これは相楽総三の義舉と目するべきなのか。

第六章 赤報隊の最后

上からの改革

相楽総三が敵前逃亡から下諏訪へ戻った二三日以降の彼と赤報隊の行動は一層理解の域を超えている。既に東山道

総督府からその討伐命令が出ている。それに従って小諸藩、御影陣屋をはじめとして近隣諸藩が赤報隊分遣隊を殺戮逮捕している。いはば猫群に囲まれた鼠というのがこととき殺戮のアトの赤報隊本隊の姿である。ワツといって猫共におそいかられたら一たまりもない。ズタズタに引きかれてしまう。そして事実そうなるのだが、相楽総裁が戻ってきて赤報隊は全然動きがない。ズツとしている。こんな敵前で銃口をむけられていて平然としていいのかと思はれる。このとき赤報隊本隊は百二、三〇名と云はれたが、この情況の中で半数が逃亡して本隊六〇名位になったと云う。当然である。逃げてでも決して運命はよい方へ開けなかったろうが、この有様では逃げ出すのが自然の姿であろう。

このダイナマイトの点火された上にのっかっている様な状態の中で、相楽総裁は小諸藩に眼にもみせてくれんと思つたという記述もあるがそんな動きは気もなくて、彼はただ捕縛者の釈放を繰りかえし嘆願しているのみである。そのみやつている。その要旨は次の如くである。

相楽は総督府に、小諸藩の不法を訴へ、

「小諸藩が勤皇ならば勤皇の士を討つといふ事はない、その暴発の様子を調べてみると、夜中に不意を襲ひ発砲したのであって、これ武士の所業に似ぬ卑怯の至りで、逆徒の行為であるから、この上は、私共が出張して非道を正し、いよいよ不勤皇の藩であつたら、僅かに一、二萬石の小藩故、手勢で討留めたく、仍て御検視一兩名、御藩からお遣はしただきたい。」（長谷川前掲書）

こういうのである。これから一つの解釈が可能であるが、これをみる限り、相楽総三総裁は、政府側からの勤皇改革を依然深く信じ、その一翼をになつて、あくまでも政府側改革先鋒として行動しようという以外はない様である。その中核は勤皇のすすめである。時勢は刻々変化し、今は、彼と赤報隊が政府側の厄介者になり、そこからお払いば

こになつて、アトはこれをどう騷擾を少なくして処刑を遂行するかに政府側の苦心があるのみであるが、この期に及んで彼はいまだに政府、政府といつてこれにくつつくことをのみ願つて、江戸の藩邸焼討ち直後の両者の緊密な関係が頭をパイに占領している如くである。相楽総三が文筆の徒であつて政治家でもなく軍器家では決してなかつたこととの一端がこれからも明らかであると云はねばならない。しかも総裁として参謀もなく、相談して大事を計るということもなくて、すべて一人で判断し、一人で断行するのである。始末が悪い。

このときの彼の嘆願書は何べん上申しても何の答へもかえつて来なかつた。それでも相楽総裁はこれをつづけている。何の疑いも自分の判断と政府側の意図にさしはさんでいない。

このとき捕らえられていた赤報隊分遣隊は、岩村田藩に一八名、御影の八名、小諸藩に五名、その他安中藩の実数不明、であつた。尚ちなみにいうと、横川の関所受取りに出向いた丸尾清、北村與六郎等の人数は、談判がうまくゆかず、下諏訪へ引揚げるとしてその途中峠道で安中藩の兵に包囲されこの両名、と他に二名がそこで斬殺された。他はとらはれた。

こういつた政府側の上からの改革以外行はおうとしないのが日本改革派の特長である。後にもふれるが、改革の志や実行はあるがそれはすべて上から行はれる様にされる。下からの暴発、革命的動きは無く、あつても直ちに弾圧される。

こういった相楽総三と赤報隊を誅殺するのが明治新政府であつた。これは非情であり、非道である。フランス革命やボルシェビキ革命等でも種々非情、非道はあつたが、それが手足となつて働く様とりしきつて使い利用した団体を、用がすんで厄介者になつたからというので、温和しくしているのを捕縛して口実もなく惨殺してしまう様なことは無かつた。こういった仕うちは日本ではよくある。日本の將棋ではその勝負で相手の駒をとつたらこれを自分の駒として使える。また自駒は敵陣へはいつたら裏がえつてより強力に作用することになる。將棋の駒には節操は無い。王様だけが勝つか死ぬかの一発勝負である。これらは日本的な一大特長である。

この具体的実行者は岩倉具視である、と云はれる。この公卿は息子の具定、具経兄弟を東山道鎮撫総督、同副総督に任じて赤報隊誅殺を実行した。ネパチズムもいいところである。

ここへきて赤報隊と西郷隆盛との關係がぎれてゐる。西郷、大久保（利通）、岩倉の三人が相談し、江戸御用盜以下の開東出兵、藩邸焼討、滋賀、三重等への出兵を西郷が主動することとし、これに赤報隊と相楽総三が一々關係してきていたのに、である。西郷は戊辰戦争で鳥羽、伏見の戦い、上野の戦い、その後会津攻め、長岡攻めと戦いの実践に活動するのであるが、赤報隊と相楽総三のことは放逐して以降かえりみないまま彼等は処刑されてしまうのである。ここにも明治新政府や西郷隆盛の冷酷さが際だつてゐる。

岩倉具視の赤報隊誅殺は慎重に行はれた。六〇名に減じた隊であるが、これらを新政府側一名の犠牲も出さぬ様に、氣くばりの上にも心してそれは実行された。謀略を以て赤報隊を安心させ、新政府に依頼させる様にこの期に及んで、劃策した。悪い話である。即ち偽の知行書等を彼等にわたし、完全にこれを籠絡した。その偽お墨付きは次の如きものである。こんなものがあればこれを受取つた者は誰でも喜び安心して戦意など消しとんでしまふ。

説

二月一〇付の相樂等逮捕の命令は一九日、取消され、そして御沙汰書が出、それは赤報隊を薩摩藩へ委任するとした。

論

其方並ニ同志人数之儀、今般薩州藩工委任致シ候間、萬事、右藩之約束ヲ受ケ、屹度謹直ニ進退致シ候様、可相心得候事

戊辰二月

總督府參謀

これをみて相樂は今度こそ赤報隊は真正に官軍先鋒隊となつたと喜んだが、内実は全くこれと異なり、新政府の間では赤報隊ホシネの処置が図られた。二四日の事である。

薩州、長州、因州、土州、大垣

相樂総三之手ニ属シ居候革莽之士、從來勤王之趣総三ヨリ申立テ候ニ付採用ニ及ビ候處命令ヲ不待、猥リニ官軍ノ名ヲ假リ、至進退、剩へ小諸藩ト戰爭ニ及ビ候風聞有之、仍テ難捨置其藩へ取調べ申付候間、時宜ニヨリ断然嚴重處置可致候事（戊辰二月二十四日達シ）

相樂総三今は全く逃れぬところである。しかるに謀略はタテマへ上依然継続する。西郷マイナス薩摩藩は次の約定書を赤報隊に手交する。

覚

一、薩州本營約

第一條 一、勤王之者ハ厚ク接待致シ天朝 御失體ニ不相成様可致事

第二條 一、勤王ト稱シ屯集致候上ハ屹度粉骨碎身致シ死ヲ以御奉公可致事

第三條 一、以後金穀之義ハ、總督府ヨリ被下候間隊中安堵致候事

右三ヶ條之約束ニ候間各隊中、厚ク相心得追テ敵地ニ進候ニ付テハ、身命ヲ捨御盡力有之候様致度候

二月二十五日

薩州

池上四郎右衛門

山下助左衛門

總督府

南部静太郎

勤王という上は、天朝の御為になる様考え、身命をなげうつて王事に奔走し、懈怠あるべからず、給與のことは總督府より下賜される、というのであるから誅殺する相手に対し言う方は騙しも騙したりとその奔放さに言葉もないが、これをわが身にみて喜ばないものは無く相楽総三と赤報隊は宿願なる、と涙をながして喜んだ。明治政府のやり方はまことに酷薄非道そのものである。この身内というも味方というも江戸御用盗以来利用してきた同志をこうも撫惨に取扱うというのは、これなればこそ明治政府が朝鮮中に侵畧してこれを明治、大正、昭和と三代にわたって継続するその心ばえが、ルーツをここにもつている、とうなずける。身内に対してこの非道さであるから侵畧した相手を非道

説
に取扱うのはまことに当然と云えようか。

論

赤報隊と二・二六事件

明治新政府の謀略はまだつづく。即ち二月二八日に東山道鎮撫總督岩倉公一行が下諏訪に入るといふしらせがあり、相楽赤報隊は急遽その本陣を明けわたすこととして他の旅館に移り、その上翌日を以てそこから二里ばかり離れた樋橋村へ移った。この恭謙な従順さは拔群である。殺しにかかっている相手にそれがお上である、という理由で恐れつつしみかしこまって行動している。これが日本人の上下関係であろう。それは昭和一年に起った二・二六事件にも共通していて、決起の青年將校は昭和天皇の重臣を殺戮しながら昭和天皇を捕えるなどは夢にも思はず、天皇の怒りにふれた一言で瞬時に武器を捨て千数百名の部隊を解散して或いは自決し、大部分は捕はれて処刑されている。なんと評すべきであろうか。二・二六事件と類似のロシアで起ったデカブリストの乱（一八二五・一二・一五）では反乱軍三千、新帝ニコライに改革をせまうて空しくモスクワ・セネート広場に集結、正規軍一万に包囲されて降伏を拒否し、その十字砲火の前に潰滅した。よい悪いの問題ではもとよりない。後者はボルシェビキ革命を起し、前者は軍部と政権に指導されて太平洋戦争を起し亡国する。

相楽総三の斬刑

明治新政府の方では、赤報隊誅滅にその方一切の犠牲を出さぬ心がまえでのぞんだ為こうした謀略を使う。下諏訪から赤報隊が撤収したのもその一つである。

月末、相楽は何遍だしても返事のない同志の釈放願いを更にもう一度出した。これが最後となる。そのとき岩村田藩の一八名が許されて樋橋村へ帰ってきた。そして岩倉公一行が下諏訪へ入った。みなは再会を喜んだが、このとき一通の書状が相楽総三のもとにとどいた。それは次の如くであった。

相楽総三

御軍議有_レ之候間、即刻、総督府本陣へ、御出頭_レ可有_レ之旨、御沙汰ノ事

総督府参謀

これがキツカケで相楽総三以下約六〇名が捕縛、八名が斬殺され、他は夫々処罰されるのである。例の隊員が一二五名から約六〇名に減じているのはこの樋橋村でのこと、という。

これから相楽総三以下処罰の描写になるがこここのところは『相楽総三とその同志』中の圧巻である。長谷川伸はこの相楽総三のこうした処刑にいたく心を動かし、万斛の同情を禁じ得ずこの一篇をなしたのであるから、それは当然であろうか。相楽赤報隊の記述は著者の寡聞からか、この一篇だけで他はない。史実を丹念に掘り起し、精細に調査し、非命に斃れた若者達の事蹟をしらべ上げている。しかしこの記録文学の巨篇も長谷川伸一代の労作で他にいろいろ調査しなければならないことも多いと思はれる。しかしそれも今となつては年代のへだたりから不可能であろう。

この類書も二、三あるがその根幹は全く『相楽総三とその同志』によっている。筆者の叙述も勿論そうである。これらは「維新史の再発掘、相楽総三と埋もれた革莽たち」高木俊輔、ミズブックス、昭和四五年。「いい話ほどあぶない」消えた赤報隊、野口達二、さえら書房、昭和四九年。小説「革莽枯れ行く」上・下、北方謙三、集英社、平成十一年、である。ひどいのは『相楽総三とその同志』を題名と著者名をかえただけで出版しているのがあることである。書きもかいたり、出しも出したり、というところか、しかし筆者も社会科学としての相楽総三と赤報隊を論じることを試みながら全くこの著述一篇にたよっていることに内心忸怩たるものがある。

相楽総三は前記の書付をみて愈々官軍先鋒たることが決定されるのだと思ひ大木四郎一人をつれて下諏訪の本陣亀屋へ赴いた。赤報隊中随一の使い手は岩船山で亡じた飯條長江齋だが、人を斬らして名人は大木四郎といはれた。年齒二〇歳。隊中には書付を疑う者もいて一人で行くという相楽と押問答の末結局大木一人がついていった。

本陣亀屋では、総督以下が近所へ難をさけ、相楽がきたらその供何名がついてこようと直ちにとつて押えりと門から玄関、居間、居間に夫々二、三〇人づつの武装藩士がかくされた。総督府は最初から彼等を有無をいはず引捕らえる計画であつた。そんな亀屋へ二人は到着した。しかしそこへついた二人は直ちに取囲まれ、大木はスハ、と相楽をかばう様に抜刀して身構えた。大木は人数を切倒そうとし瞬時に殺氣がみなぎった。しかし相楽の態度はこれに反し、大木を抑えた。「控えろ、総督府を騒がせてはならん、控えろ」と何度か叫んだ。そして大木の頭、ごしに自分の大小をなげ出した。その為狼狽した大木も手出しがならず、こうして忽ち両名は折重なる様にとらえられた。このとき大木は切齒して、小手を返して、抜刀を畳の上からずぶりと深く刺しこみ、両眼を閉じた。その眼から涙がはらはら頬を珠になつて落ちた、とある。こうしてこの後赤報隊本隊も樋橋村から呼び出され、相楽捕縛のことは伏せられ

たまで亀屋本陣で総員捕えられた。三月二日、彼等はわけられ、本陣、脇本陣の庭先に罪人の如くつながれ、隊員の非難と怒声の中、折柄降雨となり、雨中に食事も湯水も與へられず放置された。翌三日赤報隊員はすべてまだ降りつづく雨の中を下ノ原村へ引たてられた。先頭の相楽は頭からびっしょり濡れて、総髪で切りたぶさにしている黒い髪の毛に雨の珠が何百となく光つてゐた。飢ゑと寒さに顔色は悪いが、落着いた眼をしてゐる。かりそめにも面を伏せず、伏し眼にならず、昂然と歩いてゐる。その一足づつに、足袋裸足が泥濘に音をたてた、と書かれている。名にしおう長谷川伸の筆であるからその描写には眼前の景をみる様で凄惨な鬼氣がみなぎっている。

かくして赤報隊のことはやんだ。八名の斬首の他残りの者も夫々処罰された。痛ましいのは相楽総三の死と遺髪が彼の実家にもたらされたとき相楽の妻照は一子河次郎の養育を養父と姉に托して自決した。これを世人は何と評するか。源、千代丸と桜井常五郎等は、両隊に分れたがすべて捕縛され、前者は入牢のうきめをみたが、後無事に帰落した。しかし桜井以下八名は捕はれのまま刑場に引出されて処刑された。

一、こゝでこの一篇をとどめることは実際上は不可能である。相楽赤報隊をここまで叙述して来て、解明しなければならぬ問題は山積みされた。一番大きくて興味深いのは、年貢半減策にからまる共産思想で、日本の土一揆、一向一揆（農民の持ちたる国）と相照応する幕末農民騒擾である。幕末というより明治当初乱立した勤皇隊、佐幕隊と區別しなければならぬ幕末農民騒擾の国家的社会的性格の分析である。当然フランス革命、ロシア革命、そしてドイツ農民戦争などの連関に於て、この探求は行はねばならない。

二、西郷隆盛、岩倉具視、大久保利通の關係も赤報隊の運命にとっては避けて通れない。これを連結する日本改革思

説
想と実践の解明も一、との連関で解明をせまる。

三、そして赤報隊の位置づけと性格づけ、主題に従ってこれが最重要であるかと思はれるが、これを何とか研究したい。年貢半減令は韜晦政策として太政官自らが布告する場合は、赤報隊、高松隊の場合と異なる。

何れにしてもこの一篇はまだ序の口である。これらの問題の入口をのぞいただけである。筆者自らにこれを課し、自ら感奮興起してこれらの問題に肉薄したい。

本稿の成るに当って、日本文化会議、奈良県立図書館、同志社大学図書館より相楽赤報隊に関し、貴重な文献、資料の借覧を許された。ここに誌して厚く感謝の意を表したい。

参考文献

- 「相楽総三関係史料集、信濃教育会、一九五九年。「山県有朋伝三巻」、徳富猪一郎編、記念事業会、一九三三年。「山本権兵衛」、山本英輔・時事通信社、一九五八年。「上原勇作伝」二巻、荒木貞夫編、伝記刊行会、一九三七年。「二・二六事件、判決と証據」伊東隆、北博昭共編、朝日新聞社、一九九五年。「一向一揆の研究」笠原一男、山川出版、一九八七年第七刷。「一向一揆の研究」、井上鋭夫、吉川弘文館、一九八八年第六刷。「平泉寺史要」、平泉寺村編纂部、一九三〇年。「眞崎甚三郎日記」全六巻、伊藤隆他編、山川出版、一九八一年。「永田鉄山」刊行会編、芙蓉書房、一九七二年。「広田弘毅」、伝記刊行会、芸術書房、一九九二年。近代百年史、国際文化情報社、一九九一年。新生日本外交百年史、伊勢新聞社、一九五三年。

Each "Hitler" written by these scholars and researchers as W.L.Shirer, A.Bullock, J.C.Fest, J.Toland, W.Maser, and

M.Domarus. Each "Mein Kampf" edit. By Franz Eher Nachfolger, R.Manheim & D.C. Watt, J.Chamberlain and 9 others, and J.Gaudefroy et A.Calmettes. Each "Napoleon" by a.Guerard and G.Lefebvre. The French Revolution, by A.Goodwin, 1968 Fourth Edit. La Revolution frencaise, dirigé par F.Renouvin et serit par A.Fugier 1954. Each "Mussolini" by M.Gallo, D.M. Smith and Musslini's Roman Empire by D.N.Smith. Les Relations franco-Alemandes, par R.Poidevin et J.Beréty 1977. Histoire de l'Italie, du Risorgimento à nos Jours, 1977. A History of Russia, B.Dmytryshyn, Prentice-Hall, Inc., 1977. A short history of the USSR, two vols. Progress Publishers, 1965,. Lenin, N.K.Krupskaya, Moscow, 1959. The Gentlemen Negotiators, Macmillan, 1971.

